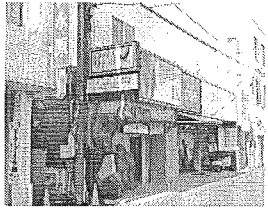


備忘録 夢の街跡 第4回 樞原を歩く “楠田行展”

今回ご紹介する奈良県樞原市は、694年に飛鳥浄御原(きよみはら)宮から都が遷された藤原京や樞原神宮、そして戦国時代の寺内町、今井町などで有名です。特に今井の風情ある町並みはCMでも起用され、休日には観光客が多く訪れます。しかし樞原と言っても本稿は、あくまで色街跡を散策するのが趣向。八木町近辺のご紹介と参りましょう。

今からおよそ1年半前のこと。酒に酔った男が夜盗虫のように、いかかわしい看板に吸い寄せられていました。2つの店の名前を示す「スリル」「モンスター」と書かれた看板<写真①>をしげしげ眺めた後、酔っ払い「このお店はどういう店なんですか?」「女性の体を多少お触りできるお店です」。冷静なトーンで呼び込みの店員が答えました。呼び込みといっても、客をクールに店内へ導くだけのよう。スーツ姿の呼び込みは若い女性でした。

<写真①>



‘多少お触りできる’というフレーズに笑いを堪えながら「なるほど。そうなんですか」。何がなるほどかはいざ知らず「またの機会に」と茶を濁し店の前を離れ、近鉄大和八木駅に向かって歩き去りました。‘多少お触り。思い返すほど笑いがこみ上げてきます。樞原市南八木町にあるセクシーキャバクラの前での出来事でした。

中途半端なものとは言え、八木に性風俗店があることに興味を引かれた僕は、後日散歩に出かけました。『樞原市史』にある大正3年の調査によれば、八木町や今井町などの市街地に芸妓が9人、酌婦は32人居たようです。近鉄八木駅から南へ徒歩約10分、JR畝傍駅から西方面の一角には現在でも、ビジネス旅館や旅館跡が僅かに残っています。

印象深いのは畝傍駅西隣の朱塗りの建物。「この建物はどのような建物なんですか?」と気になっていましたが、毎度お馴染み『奈良縣電話番號簿』(昭和9年)という古い電話帳の八木の項に「池竹亭」の屋号を持つ料理旅館<写真②>の記載がありました。

<写真②>



宅地図との照合で旅館跡であることが判明。件の「スリル」も南八木町に位置し、町内には「双葉」という貸席の遺構<写真③>もあります。(多少のお触りだけではなかったであろう)匂いが立ち込めています。

<写真③>



売春防止法(昭和33年4月1日から施行)以前、県内には木辻町(奈良市)、洞泉寺町(大和郡山市)、東岡町(同)の3つの赤線地帯がありました。売防直前の『大和タイムス』昭和33年2月7日付けに、‘青線地帯を求めて’という見出しの記事を発見しました。

記事は「樞原署防犯課の調べによると現在樞原市内に料理、旅館などのカンパンを掲げているのが、三十三業者にのぼっている。このうち従業員が売春をかねる、いわゆる“二枚カンパン”の女性が六十六人(防犯課のリストによる)もあり、～」と伝えています。

また、同28日の記事には、洞泉寺の特殊料理業組合長が「(赤線廃止後、職を失う女性たちは)八木方面の青線につながるようしているようだ」と語っており、青線地帯としての八木は当時でもかなり有名だったようです。

人が集まれば、欲望もさまざま。酒に酔い、紅灯に群がった夜盗虫たち。彼らは八木で「どういふ」ことを発見したのでしょうか。今は夢の街跡ですが、建物の跡から当時の街並みや人間模様が浮かび上がるようです。近代の遺構と現代のセクキャバ。町をシラフで歩いてみても「なるほど。そうなんですか」という発見があります。誠

主な参考資料・文献(年代順)
『奈良縣電話番號簿』大阪通信局(昭和9年10月)
『大和タイムス』大和タイムス社(昭和33年2月)
『樞原市史 本編 上巻』改訂樞原市史編纂委員会／樞原市役所(昭和62年3月)

information

今回はゲストDJにBEARこと木村さんをfeature。90分(19:30~21:00)にわたる黒い熊さんのタフでワイルドなプレイ、是非楽しんでください。

次回コレクティブは冬の開催を予定しています。詳細はブログでご確認下さい。

<http://blog-collective.blogspot.jp/>

自炊 “yu”

実家を出て5年が経ち、相変わらず欲望に身を任せた独り身生活を続けている。公私問わず、周りでは、やれ結婚だ、やれハネムーンだ、出産だと、それに先行く貯蓄だのと中長期的計画の話をする率が上がっている(おめでとございます)。

だが待て、それよりは、昨日の話、今日の話をしようじゃねえか。もっとフォーカスは一日ごとでしょ。その話おろそかになってない? 目に見えない先のことばっか考えてないで、今夜の晩飯、少しはマジメに考えたらどうよ? 笑い飯は「晩飯のこと考えたらアカン、晩飯のこと考えたらアカン」と言ったが、むしろ晩飯のことを考えようよ。

食事っていうのは、生きてる喜び実感する基本的な行為。特に一人で飯食うっていうのは、ムードじゃなくて、そのものなんだなあ。やっぱりテキトーなもんを一人で食うときの心の貧しさって痛いほどしみるもんな。だから、一人でいい飯食わなきゃ。泣いてても、笑ってても飯は食うんだからね。

で、平日の一人晩飯。何屋で食うかそれなりに悩んで店入って、1,000円ぐらいの定食みたいなやつ頼んで、全然なんの攻めもない味のが出てくると正直金返せと思う。何も面白くない飯に金は払いたくない。また、それだけで、残念な気持ちになってるその時間が無駄だよ。

そうなってくると、そのまま外食狂になって、食べログの星取り情報に毒されていくのもなんだか嫌になるし、店のクチばっかつける構え方ってどうよってところもあるし、もう、だったら、食いたいもののうまレシピ調べてmyself!!自分で作った方が絶対いいでしょ、安いし、納得できるしってことで、レシピを調べまくっている。

いや、本当に便利な時代になったもので、スマホはより自炊生活を革命的に向上させている。こんなシロウトが和洋中間わず、親も知らない料理の作り方を指一本で探し出せる。また、それを、通勤電車、スーパー、自宅のキッチンと自炊の現場で確認できるというのが劇的にいい。蛇足になるが、なにつくろうかなと考えたその場所はどこであろうとそれが自炊の現場なのである。特売の食材はその日その日によって変わるが、その食材から狙い打ちしてうまそうなレシピをあさるのだ。

とにかく、少ない時間でさっと数多く当たれるところがいい。日々のものはこういった速効性を重視しつつ色々やってみるのだ。今年よくやってるのは、いろんな野菜のナムルシリーズ。とりあえずお買い得の薬物野菜ともやしをさっとゆでてガラスープやゴマとかである。炒め物で結構油脂分過多だったので、やってみたが、コレが思ったより簡単で、おひたしより味のバリエーションもあって、飽きない。

あと、マニアックながら実はめちゃくちゃ自作が簡単なザワークラウト、これは酢を使わないドイツ料理でよく使われるキャベツの乳酸発酵漬物。これは本当にいろんな意味で色々素晴らしいが詳細は割愛。

まあ、cookpadなどの投稿レシピサイトは、いわば素人の寄り合いみたいなもので、いいレシピもあるが、そうでないのも結構ある。私が個人的に注目するのは、料理研究家のブログや、自信満々男の料理系ブロガーの上げるレシピである。

よく、ホームパーティーごとがあると豚の角煮を作るのだが、このテの男連中のレシピというのは、実にめんどくさい。もう、ブログの書き方とか、ドヤ顔が透けて見えて相当強烈だが、これをまた疑ってかかって、そのレシピを3つ4つ調べ合わせてええとこをそれぞれかいつまんで実践に移そうという自分の欲深さも相当強烈なもんである。ただ、自分にこういうきっかけを与えられるのは誰かに振舞って喜ぶリアクションを楽しむにできる自分がいるからである。

また、その振舞う時の感覚をより充実したものにするには、手間が重要なのである。とにかく、手間、手間、無駄、手順、この人に見られないこのプロセスが。そうこうして、まるで一瞬のような楽しい一晩の食卓の時間を迎えるわけである。

結局自分が自分のためにやる自炊が周りの人と楽しめる鍵になっていると考えたら、この行為を気合入れてやり続ける価値がますます重くなってくるとなるといった次第。これって、音楽好きが高じてDJするのも同じ感覚だよな。

私が、尊敬する男として、料理研究家ケンタロウがいる。わざわざ書く必要もないが、尊敬レベルでいけば、Terrence Parkerと同一である。今自炊に没頭しているきっかけは間違いなくこの人によるものだと感謝している。簡単に(簡単に見せるのも上手い)、そして男目線に立った満足感あるレシピ。もう、首都高でのバイク事故から一年以上経つが、この人の完全復活を願っている。彼の著作の一つでクレイジー自炊野郎の聖書(パイブル)でもある『ケンタロウのめし汁おかず』。みそ汁を作るページでのぐっとくる一節、「ごくごくあたりまえの具が入ったみそ汁。でも、こんなあたりまえの料理が、おいしく作れると幸せになる。むずかしいことはなにもなく、ただ、ちゃんとだしをとる。それだけのこと」。

もうこれは、人生、全てに効いてくる言葉ではないか。うん、なんか学校通ってたころに先生とかに言われた「朝の挨拶が一日にとって大事なんだよ」みたいな、聞いてて半分うろせえなって感じの言葉の真髓が、一瞬にしてわかってしまうかのような。そしてさらに参ったのは、そのだしをとるページで、「母、カツ代直伝の方法を紹介しよう」とある。

色々料理を作ってみたけど、確かに、実家のみそ汁だけには勝てない。こうして、己の身の程を汁(知る)ことがまた新たな人生の原動力となる。自分としては、当分、自炊、音楽のツートップに力注いでしばらく生きていこうかと。それを言うためにうだうだ書いてきましたが、それも人生楽しくしてくれる周りの皆さんのおかげですとかスツと口をついて出てくる歳になったもんだなあと思ったらcollectiveも9年経ったんですね(ありがとうございます)。

名曲探訪 tr.006 “kengo matsui”

<Artist> Jose James
<Title> Save Your Love For Me
<YouTube> <http://www.youtube.com/watch?v=JaZsBCF8cyY>



今回は新世代の男性ジャズボーカル、Jose Jamesの2010年のアルバム“Blackmagic”から、Buddy Johnson作曲の1955年のバラード曲のカバー、“Save Your Love For Me”を取り上げます。

楽曲の骨格のコード進行としては、50年代ポップス(=ジャズ的)な基本に準じたオーソドックスな進行です。このJose Jamesのバージョンでは、ピアノの部分がとくに聴き取りやすいですが、半音ずつコードが連続して上がる、下がるといった、半音階の進行を多く挟みこんでいます。ドビュッシー的な半音階手法をモダンジャズに持ち込んだのはデューク・エリントンともいわれますが、そういった音楽表現手法をうまく用いて、エレガントなムードを表現しています。

半音階で進行することは、鍵盤のすべてのキーを順番に叩いていくことになり、本来「ドレミファソラシ」という7音で構成される調性世界の「破壊」とも言え、同時に全てのキーを叩けば騒音の塊(トーンクラスタ)ですが、半音ずつ順番に上下にコード進行させると調性外にいったん出てしまうにもかかわらず不思議と浮遊感のあるエレガントな響きとなります。音楽の魔法のひとつだと思います。

しかし、実はこの曲で特筆すべきはコードではなく、リズムにあります。まずイントロのドラムスのパート。普通に4/4拍子で叩いているようでいて、3連譜的(3拍子的)なノリを孕んだ、かなり微妙にゆらいだ、もたつたようなビート感を出しています。

また曲が始まってからも、よくよく聴くと、ピアノ、ドラム、歌などがリズムの中心からわざと微妙に、微妙に、ずらしてあるところがあり(おそらく後で微細にエディットしたものと思われます)、リズムのずれ、ゆらぎ、訛りといった部分を、地味ながらもかなり実験的に取り込んでいます。ピアノソロのパートなど、わざとどたどしいような、リズム的にゆらいだ弾き方をして、この楽曲での狙いを明確に表明しています。もちろんずればなしではなく、決めるべきところではびしっと決めている訳ですが。

そしてエンディング部分では、ベースラインが半音階の上昇・下降を奏で、この曲でのポイントの半音階進行を改めて示して終わっていきます。

従来のブラックミュージックやジャズのイディオムに、リズムや音程のずれや訛りという現代的なセンスを持ち込むことを、このアルバムでJose Jamesは熱心に取り組んでおり、アルバムのどの曲もジャズとヒップホップ、R&Bなどをミックスしたすばらしい曲ばかりです。これはこの時期のセンスあるミュージシャンたちに見られた潮流ですが、Robert Glasperのアルバム“Black Radio”のグラミー受賞(2013年)で一つの結実を見せたといえるでしょう。